

調査速報

檜山海域スケトウダラ漁期中調査の結果について

2005年 12月 13日

北海道立函館水産試験場

2005年12月5～9日にかけて、函館水試調査船金星丸を用いて檜山沿岸域のスケトウダラ漁期中調査を実施したので、結果をお知らせします。調査項目は、計量魚群探知機による魚群分布状況調査、CTDによる水温塩分観測、中層トロールによる漁獲調査です。

- 檜山沿岸域の魚群反応量は、昨年の漁期中調査時をやや下回った。
- 夜間の主な分布水深帯は200～250mであった。
- 主な分布水深帯の水温は約3～7℃であった。
- 中層トロールによる漁獲物の尾叉長は、36～51cm台で、39cm台と44cm台にモードをもつ2峰型であった。

1. 魚探反応

魚探調査による魚群反応量は、檜山の沿岸域（図1の青線）では昨年の同調査時をやや下回りました（図2）。ただし、調査を行った時期が昨年よりも1週間程度早いことから、今後さらに魚群が集まってくる可能性もあります。

魚群反応は相沼沖禁漁区から乙部沿岸域で最も強く、南部の海域に向かうほど弱くなっていました。また、分布層の厚さも南部の海域ほど薄くなっていました（図3,4,5,6,7）。以上の結果は、昨年の同調査時と同様でした。

夜間における魚群の主な分布水深帯は、乙部沖では深度170～270m、江差沖では200～250m、上ノ国沖では220～250mにみられました。とくに海底斜面上とその周辺部に強い魚群反応がみられました（図3,4,5）。

奥尻堆（奥尻島南側）では魚群反応がほとんどみられませんでした。また、松前小島周辺ではやや反応がみられましたが、檜山沿岸部よりも弱い反応でした。

2. 海洋観測結果

乙部沖および江差沖の水温の鉛直分布図を図8に示しました。

魚群の分布が多くみられた水深帯の水温は、乙部沖（St.5）の170～270mでは2.3～7.2℃、江差沖（St.4）の200～250mでは3.5～7.2℃でした。今年の水温は2001年以降では最も高く、水温の高かった2002年と同様もしくはやや上回っていました。また、乙部沖（St.5）の水温を昨年の同調査時と比較すると、100～200mで2～6℃、200～300mで1～2℃も高くなっていました。スケトウダラの産卵場として好適と考えられる2～4℃の水温帯は、乙部沖で200～300m、江差沖で240～280mとなっており、乙部沖では昨年の同調査時（140～200m）に比べ60～100mも深くなっていました。

3. 漁獲物の体長組成

12月7日の昼間に、相沼沖禁漁区で中層トロールによって漁獲されたスケトウダラの尾叉長組成を、図9に示しました。

スケトウダラの尾叉長は36~51cm台で、39cm台と44cm台にモードをもつ2峰型となっていました。

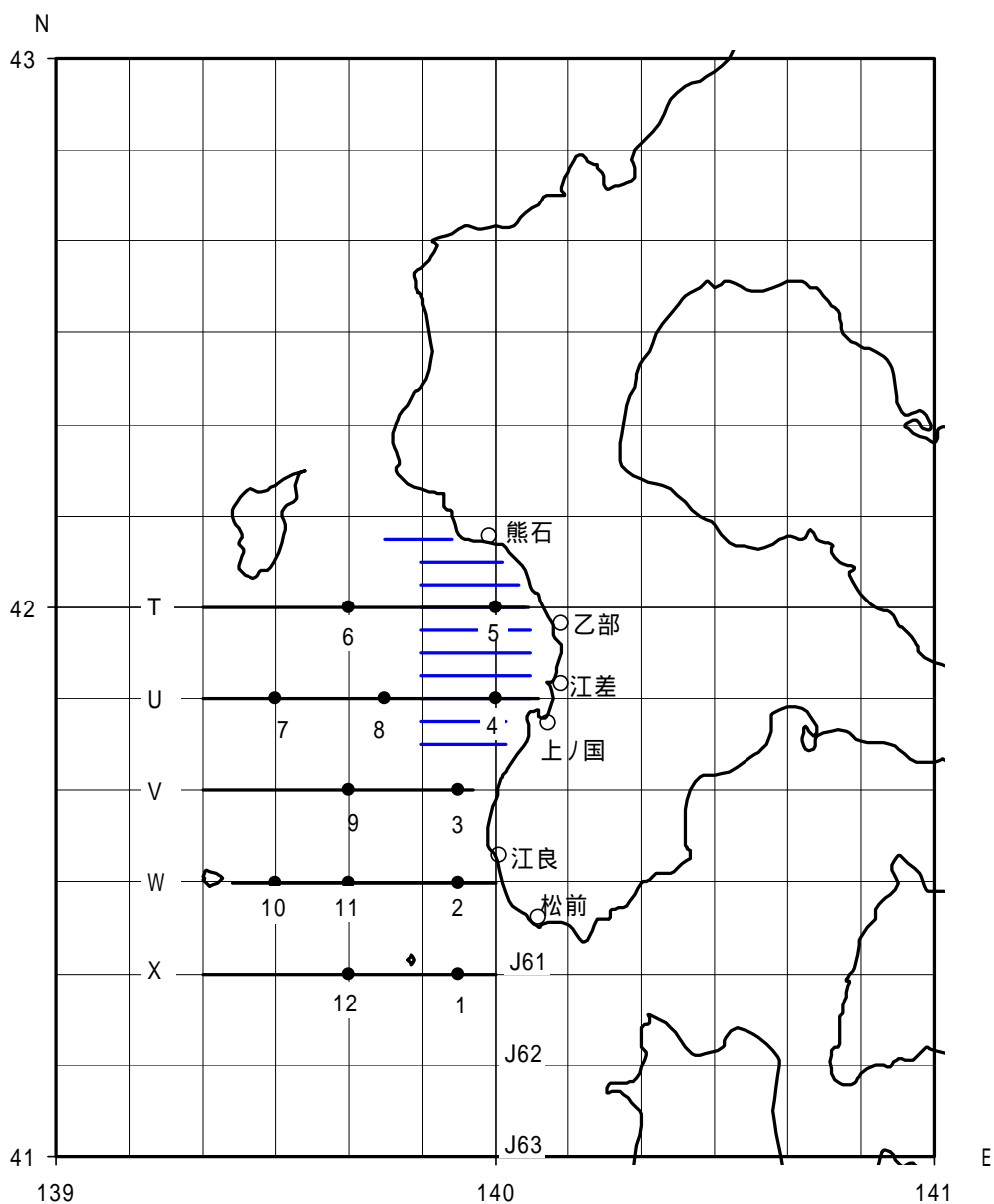


図1 スケトウダラ漁期中調査海域
太線は魚探調査ライン, 黒点は海洋観測点

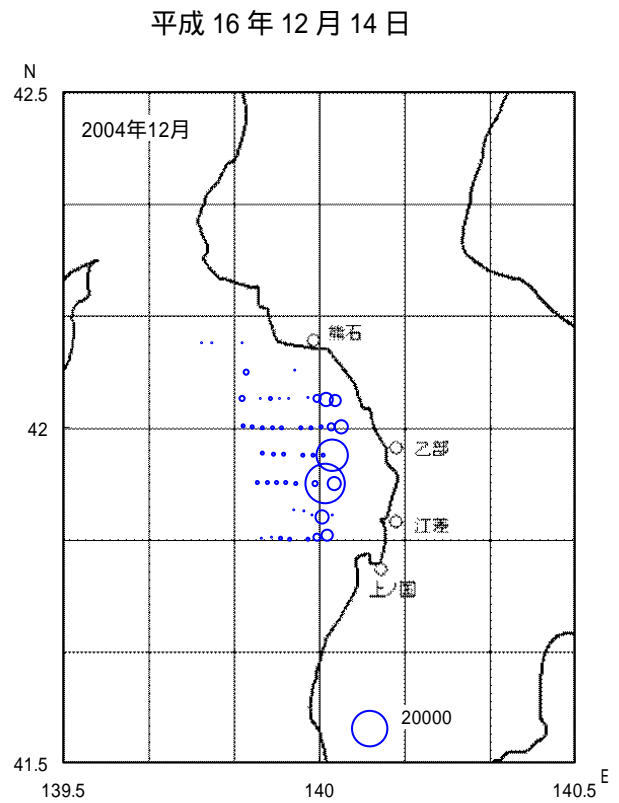
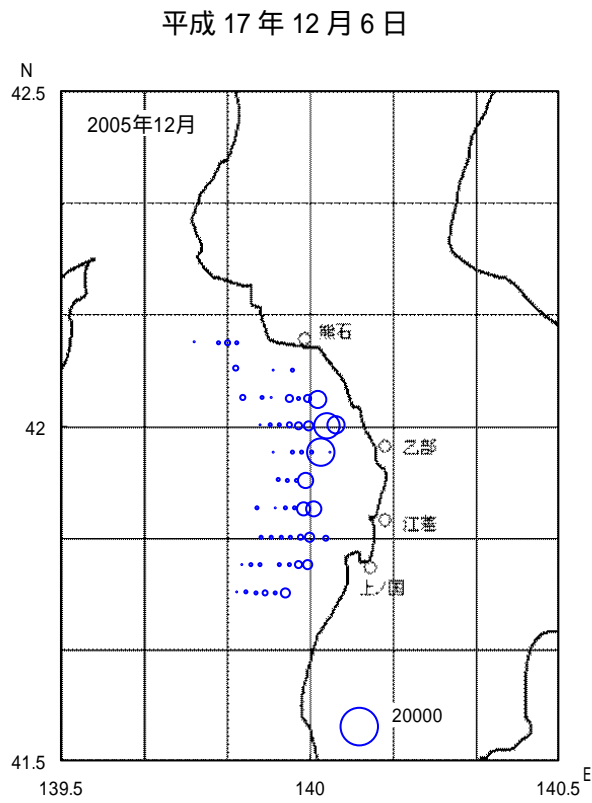


図2 檜山沿岸域における魚探反応量 (S_A : m^2 / NM^2)

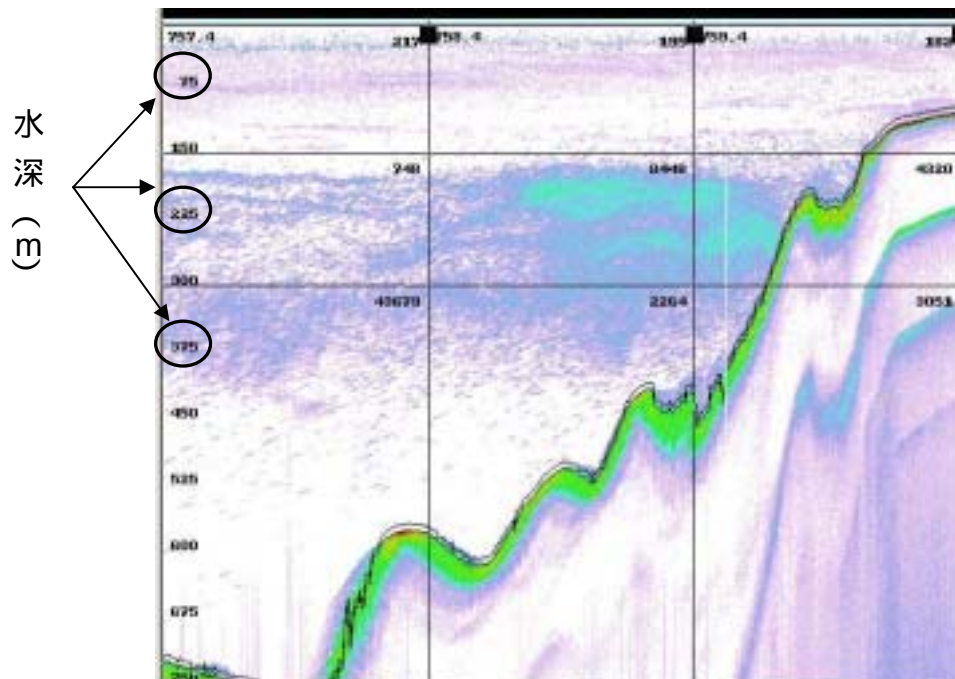


図3 乙部沖の魚探反応(42° 00' N 線上, 夜間)

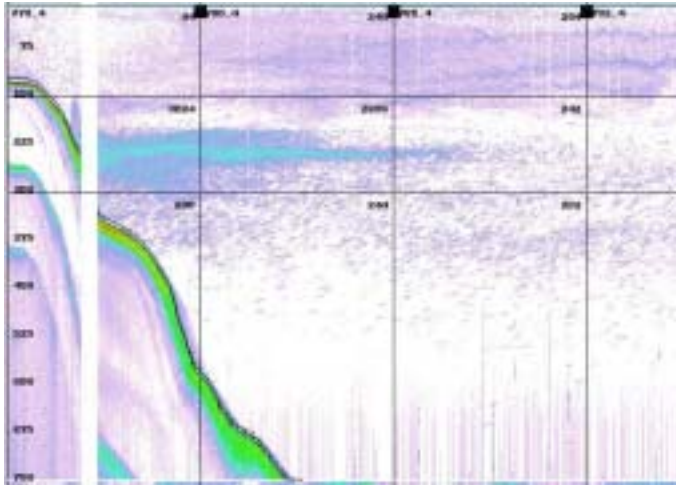


図4 江差沖の魚探反応
(41°52.5'N 線上, 夜間)

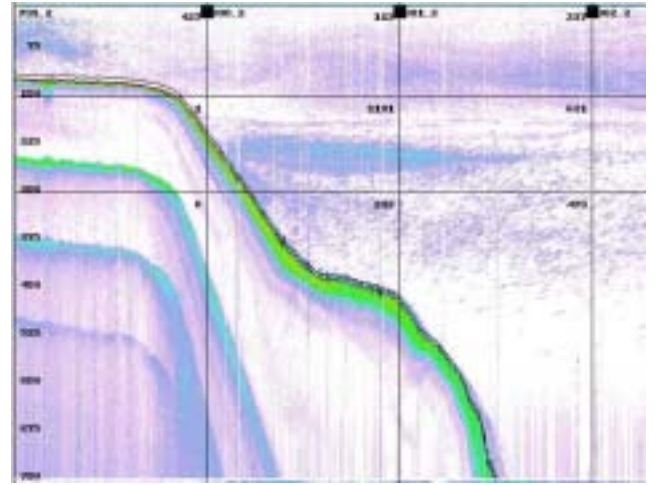


図5 上ノ国沖の魚探反応
(41°47.5'N 線上, 夜間)

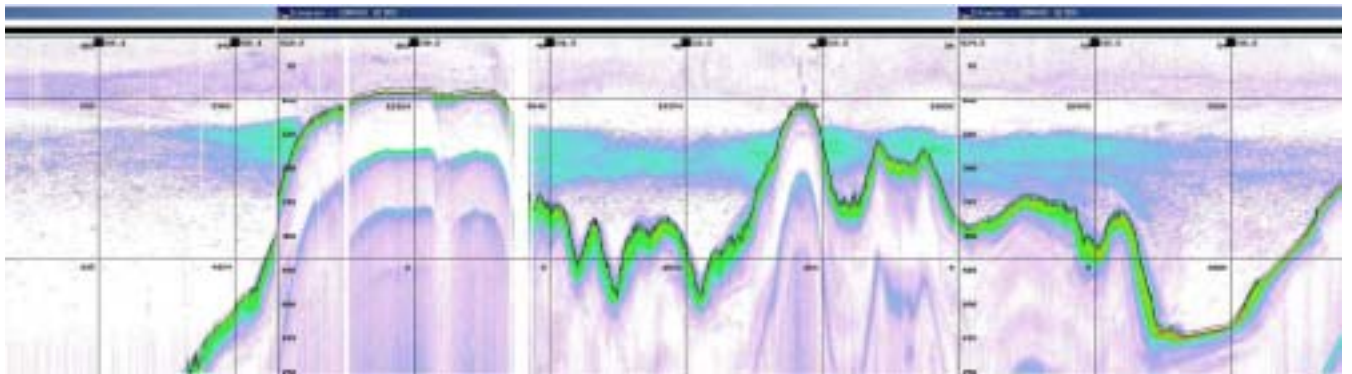


図6 延縄漁場内の 41°55'N ~ 42°02'N にかけての魚探反応
(12月7日午前5時~6時)
一番反応が強い時間帯に調査を行ったので, 図7に比べ反応量が過大になっている可能性があります

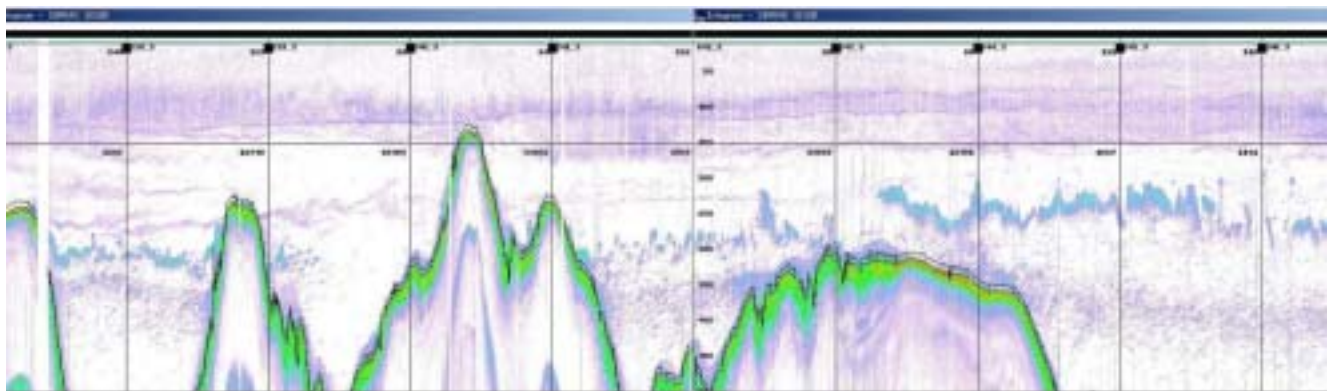


図7 延縄漁場内の 41°48'N ~ 41°55'N にかけての魚探反応
(12月6日午前9時30分~10時30分)

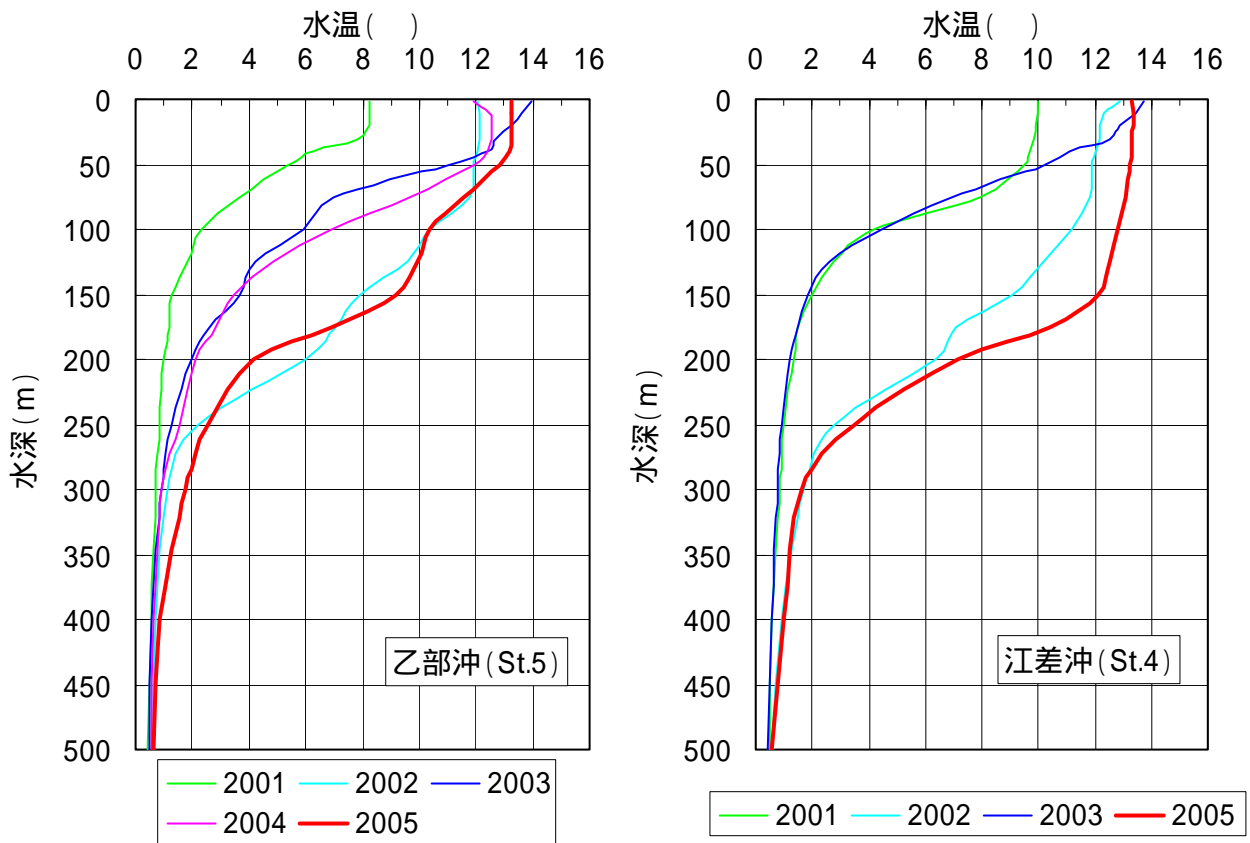


図8 乙部沖および江差沖の水温鉛直分布図

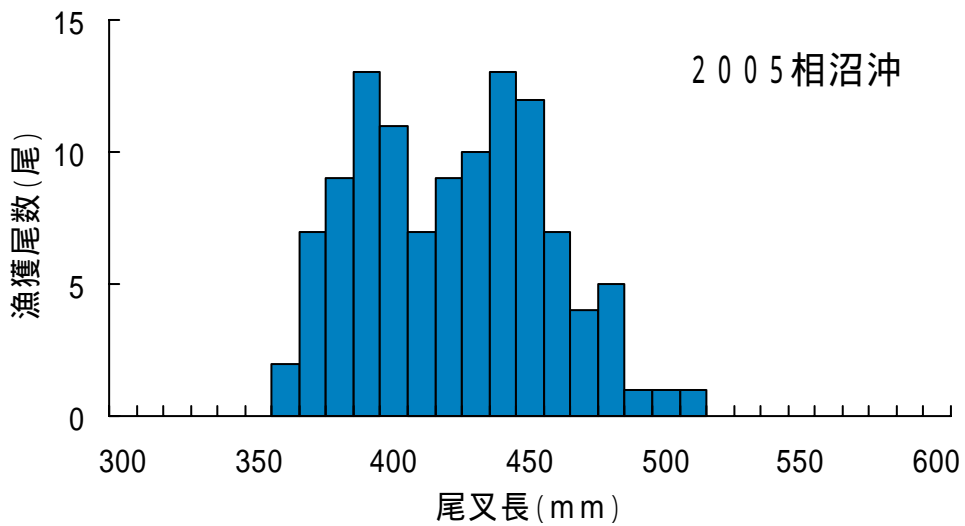


図9 中層トロールで漁獲したスケウダラの体長組成
(2005年12月7日 相沼沖)